

16. あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。
17. 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。
18. 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。
19. 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
20. こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。

説教

これはイエスさまが山の上で弟子たちに教えた山上の説教の一節です。

イエスさまは一通り教えてから、その締めくくりとして、教えたことを行うよう、いくつかの話をなさいます。その最初が「狭い門から入りなさい」です(13-14)。それに続く話として「にせ預言者」に警戒するよう教えます。「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」(15)「にせ預言者」は、一見すると神のことばを人々に教える「預言者」風なのですが、実際には「預言者」ではありません。語る教えも人の欲をかき立てる御利益や儲け話であったり、根拠のない空しい安心や喜びを与えるので、人々の人気を得るのですが、それは神のことばではありません。人間のことばです。真理とはほど遠い「嘘偽り」であり、「欺しごと」です。

この「にせ預言者」について、15節で、イエスさまは彼らが見た目は「羊のなり」をしているものの「うちは貪欲な狼」だと言われます。「貪欲な」とは「飽くことなき、飢えきった」、あるいは「ほしいまま、自分勝手」の意味で、「にせ預言者」が神のためでなく自分のために生き、神のみこころを行わず自分の欲の実現に明け暮れていたことがわかります。

そうして、続く16節以降で、「にせ預言者」の見分け方が伝授されます。それは「実によって」判別できるというのです。「あなたがたは実によって彼らを見分けることができます。ぶどうはいばらからは取れないし、いちじくはあざみから取れるわけがないでしょう。」(16)「にせ預言者」は見た目は「預言者」なのですが、それはあくまで外見だけの話であって、その中身を知ることは難しいことです。それで、イエスさまは、その人の中身が本物か偽物かを判別する基準が彼らの生み出す「実」にあると教えてくれました。

「ぶどう」はイスラエルの豊かな食生活を象徴する果物です。イスラエルが神の祝福を受けている時には、ぶどうは不作にならないと預言者たちは教えました(マラキ3:11)。一方、「いばら」は、人間の罪の故に神がこの地を呪って生じさせる、神の呪いと不毛の象徴です(創世記3:18)。つまり、神の祝福の実である「ぶどう」は、呪われた「いばら」から生じることはあり得ない、というわけです。このことは、続く「いちじく」に於いても同様です。アラブ民族の間では「天国より来りし果実ありとせば、それはいちじくである」と言われていたように、「いちじく」は貴重でした。一方の「あざみ」は、これまた「いばら」と並んで、人の罪の故に神が生じさせた、神の呪いと不毛の象徴です(創世記3:18)。つまり、ここでもイエスさまは、天からの祝福の糧である「いちじく」が、呪われた「あざみ」から生じることはあり得ない、と言われるのでした。「ぶどう」はあくまで「ぶどうの木」から、「いちじく」もまた「いちじくの木」から生じます。こうして、イエスさまは「にせ預言者」の見分け方を伝

授してくださいました。その預言者が「にせ」か「本物」かは、結ぶ「実」によって判別することができます。

「良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます」（17）。そして、「良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません」（18）。「良い木」の「良い」とは「善良な、憐れみ深い」といった意味です。一方、「良い実」の「良い」の方は「良い、美しい、称賛に値する」という意味で、「憐れみ深い善良な木」から「美しい良い実」が生じる、ということになります。これとは反対に、「悪い木」の「悪い」とは「腐敗した、不健全な、質の悪い、無価値な」という意味で、「悪い実」の「悪い」の方は「病的な、邪悪な」という意味です。つまり、本物の預言者は「善良で恵み深い」ので「美しい良い実」を結ぶのだが、にせ預言者の場合は「不健全で腐敗した木」であるためにいくら待っても「病的で邪悪な実」しか生じない、とイエスさまは言っておられることとなります。一見、両者は同じように見えるのですが、その中身は実は全く異質な別物で、真の預言者が「美しい良い実」を結ぶのに対して、「にせ預言者」は「病的で邪悪な実」しか結ばないのです。

それでは、イエスさまは「実」によって偽か本物かを判別できると言うのですが、そもそもこれらの「実」の良し悪しはどのように判断できるのでしょうか。イエスさまは続く 19 節でこう言われます。「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」ここでイエスさまは神によってなされる最後の審判のことを話されます。その「実」が良いか悪いかは最後の審判の時に明らかにされる、神がそれを明らかにする、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれる」と言うのです。つまり、何が良い実で何が悪い実なのか、その最終的な判断は人でなく神の前になされます。

そもそも「にせ預言者」は「羊のなり」をしているので、どこからどう見ても人目には「預言者」に見えるのです。いかにも預言者らしい振る舞いをします。言っていることもそれっぽくて真偽を見分けるのがなかなか困難です。キリスト教の歴史は邪教異端との戦いですが、異端だからといってパッと見て「異端」と判別できるわけではありません。「異端」も聖書を語ります。エホバの証人や統一協会のように、見た目も上品で人当たりも優しい場合が多いです。韓国の異端「新天地」のように、細かく聖書を教育し、熱心に伝道し、祈り、献金し、献身的に奉仕します。異端ほど熱心です。私たちも見倣わなければなりません。でも、どんなに熱心に信奉しても、所詮、異端は異端です。見た目はどうであれ、外面はどうあろうとも、異端はどこまで行っても異端なのです。

悪い木は悪い実を結びます。そして、その結ぶ「実」は、人目にどう映るかより、むしろ神の目にどう映るかが肝心です。なぜなら、究極その「実」は、神が食べて味わうための「実」だからです。「実」とはフルーツのことですが、りんご農家でもぶどう農家でも、どこの農家でもただ苗木を植える人はいません。果物の木を植え、水と肥料をやり、雑草を取って、手間暇かけて育てるのは、果実を収穫するためです。それなのに、せっかく植えて育てても良い実を結ばず悪い実しか結ばなければ、イエスさまが言われるように、神に「みな切り倒されて、火に投げ込まれる」のは当然です。つまり、実の良し悪しは最終的には神が判断して審判なさるのです。「良い実」を結べば神に喜ばれ受け入れられますが、「良い実」を結ばなければ容赦なく「みな切り倒されて、火に投げ込まれます」。

この世界の絶対的な中心は神なのです。人間ではありません。神が世界を造り、支配し、審判なさいます。それで、神のためにならないものは永遠の火で焼かれます。私たちは、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」とのイエスさまのみことばをよく考えてみなければなりません。ここから「真の預言」と「にせ預言」とを判別しなければなりません。果たして最後の審判に耐えうるか否か、結局はそれがすべてです。何がうまい話か、何が儲かる話かと、目先の損得勘定や御利益に惑わされてはなりません。たとえ目先の御利益を得て一時の安楽を手にしたとしても、永遠の滅びに投げ入れられては意味がないからです。

以上を踏まえて、イエスさまは総括なさいます。「こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」(20) イエスさまはその真偽を「実によって見分けることができる」と言われます。肝心なのは、その教えが天国に直結するものであるか、です。すなわち、神を喜ばす「良い実」を生じるか否かです。どんなに人受けしても、「これは良い」と自分で思っても、神がそれを良しとしなければ、それは「悪い実」です。永遠の滅びの「火」に直結します。あれこれ魅力的で華々しく感動的な楽しい「預言」が次々と説かれたとしても、その結論が偶像崇拜を許容し、殺人や姦淫、盗みを促進するものであるならば、結局、それは、神が食べられない、神が忌み嫌う、「悪い実」を生じる、「悪い木」です。すなわち、「にせ預言者」なのです。

「にせ預言者」の本質は「食欲な狼」です。神を知らず、いつも自分中心で、神のみこころならぬ自分の欲の追求に明け暮れています。神の恵みを知らないのに、その神の恵みに応えようとか思わないし、何が神と人のために本当に益となるのか、そんなことははっきり言ってどうでもいい、全く関心がありません。ただ食欲です。食欲あるのみです。自分のことしか考えません。神の恵みを知らないのに、満ち足りることがありません。満足も感謝もありません。もっと欲しい、もっと儲けたいと、食欲の塊です。そうして、どうしたら社会で成功するか、どうしたら金持ちになり幸せになるか、人の欲をそそる話をして自分の信者を増やします。「預言者」の顔をして「うまい儲け話」を説くのです。

でも、どんなにこの世で成功しても、それは永遠のいのちと少しも関係ありません。この世で金持ちとなり、立派に出世して成功すれば、神が喜んでくれるのでしょうか？よくやった、よく頑張った、立派に世の中で出世して、金儲けして、「ノーベル賞」をもらって有名になってよく頑張ったと、神は喜んでくださるのでしょうか。そんなことは決してありません。聖書のどこにもそんなことは書いていません。別に「ノーベル平和賞」の受賞者にケチをつけるつもりはありませんが、そもそも「死の商人」ノーベルの名前のついた「平和賞」それ自体が怪しい「平和賞」だと思います。しかも、それがあたかも世界で最高に権威ある「平和賞」であるかのように思われるのには疑問を感じます。「ノーベル平和賞」が世界の平和の基準なのではなく、神のことばである聖書こそ世界最高の平和の基準です。

世の中で通用する常識と神が喜ぶこととは全く別ものです。別次元のもので、そして、神が喜ばれることは、ただ神のみこころを行うこと、そのみことばに従うことです。神の恵みに感謝し、神の恵みに応えて神と人を愛して生きること、これが「良い実」です。イエスさまが言われた「良い実」です。神がそれを喜ばれる「良い実」です。この上なく最高に「良い実」です。そして、その本当に「良い実」をもたらすべく、あらゆる困難と迫害に耐えて神のことばを教え続ける、それが真の預言者なのです。